

古貉

泉鏡花

青空文庫

「しやツ、しやツ、しやあつ！……」

寄席のいらつしやいのように聞こえるが、これは、いざいざ、いでや、というほどの勢いの掛声と思えば可い。

「しやあつ！ 八貫—ウン、八貫、八貫、八貫と十ウ、九貫か、九貫と十ウだ、……十貫！」

目の下およそ八寸ばかり、濡色の鯛を一枚、しるし半纏とい
う処を、めくら縞の筒袖を両方大肌脱ぎ、毛だらけの胸へ、釣
りに取つて、尾を空に、向顛卷の結びめと一所に、ゆらゆら
と刎ねさせながら、掛声でその量を増すように、魚の頭を、下腹
から膝頭へ、じりじりと下ろして行くが、

「しやツ、しやツ。」

と、腰を切つて、胸を反らすと、再び尾から頭へ、じりじりと響ひびきを打たして釣下げる。これ、値を上げる寸法で。

「しやツ、十貫十ウ、十貫二百、三百、三百ウ。」

親仁おやしの面つらは朱そそを灌いで、その吻くちばしたこは蛸のごとく、魚の鰭ひれは萌黄もえぎに光つた。

「力が入るね、尾を取つて頭を下げ下げ、段々に糶せるのは、底力
は入るが、見ていて陰気だね。」

と黒い外套がいとうを着た男が、同伴つれの、意気で優容やさがたの円鬚まるまげに、
低声こしえで云つた。

「そう。でも大鯛をせるのには、どこでもああするのじゃアあり

「ません？……」

人だちの背後うしろから覗のぞいていたのが、連立れんりつつて歩き出して、

「……と言いわれると、第一、東京の魚河岸の様子もよく知らないで、お恥かしいよ。——ここで言いつては唐突だしぬけで、ちと飛離れてゐるけれど、松江だね、出雲いずもの。……茶町ちやまちという旅館はたご間近の市場で見たのは反対だっけ——今の……」

外套の袖を手で掲げて、

「十貫、百と糶せりあ上げるのに、尾を下にして、頭を上へ上へと上げる。……景気もよし、見ているうちに値が出来たが、よう、と云うと、それ、その鯛を目の上へ差上げて、人の頭越ひらりしに翻然ひらりと投なげる。——処ところをすかさず受取るんだ、よう、と云いつて後うしろの方で。」

……威勢がいい。それでいて、腰の矢立はこのも同じだが、紺の鯉こいぐち口ぐちに、仲仕とかのするような広い前掛を捲まいて、お花見手てぬぐい拭ぬぐいのように新しいのを頸えりに掛けた処などは、お国がら、まことに大どかなものだったよ。」

「陽気ね、それは。……でも、ここは近頃の新聞ですもの。お魚はほんのついたりで、おもに精進ものの取引をするんですよ。そういつては、十貫十ウの、いまの親仁しんじんに叱しかられるかも知れないけれど、皆みんなが蓮根れんこん市場いちばというくらいなんですわ。」

「成程、大きに。——しかもその実、お前さんと……むかしの蓮は池すいけを見に、寄道をしたんだつけ。」

と、外套は、洋杖ステツキも持たない腕を組んだ。

話の中には——この男が外套を脱ぐ必要もなさそうだから、い
 けぞんざいだけれども、懇意なく、御免をこうむって、外套氏と
 しておく。ただ旅客でも構わない。

が、私のこの旅客は、実は久しぶりの帰省者であった。以前に
 も両三度聞いた——渠かれの帰省談の中の同伴つれは、その容色きりようよしの
 従姉いとこなのであるが、従妹はあいにく京の本山へ参詣おまいりの留守で、
 いま一所なのは、お町というその娘……といつても一度縁着いた
 出戻りの二十七八。で、親まさりの別嬪べっぴんが冴返さえかえつて冬空うららに麗
 かである。それでも、どこかひじめのある身の、縞しまのおめしも、
 一層なよやかに、羽織の肩ほっそも細りとして、抱かかえこ込んでやりたいほ
 ど、いとらしい風俗ふうである。けれども家業柄——家業は、土地

の東の廓くるわで——近頃は酒場か、カフェーの経営だと、話すのに幅が利くが、困った事にはお茶屋、いわゆるおん待合だから、ちと申憎い、が、仕方がない。それだけにまた娘の、世馴よなれて、人見知りをしない様子は、以下の挙動ふるまいで追々おいおいに知れようと思う。ちようどいい。帰省者も故郷へ錦にしきではない。よつて件くだんの古外套で、映画の台本や、仕入ものの大衆向で、どうにか世渡りをしているのであるから。

「陽気も陽気だし、それに、山に包まれているんじゃない、その市場のすぐ見通しが、大きな湖だよ、あの、有名な宍道湖しんじこさ。」
「あら、山の中だつて、おじさん、こちらにも、海も、湖も、大きなのがありますわ。」

湖は知らず、海に小さなものといっては断じてあるまい。何しろ、話だけでも東京が好きで、珍らしく土地自慢をしない娘も、対手あいてが地方だけに、ちよつと反感を持ったらしい。

いかにも、湖は晃々きらきらと見える。が、水が蒼穹おおぞらに高い処に光

っている。近い山も、町の中央の城と向合つた正面とは違い、場

末のこの辺は、麓あたりの迫る裾ふもとになり、遠山は波濤すそのごとく累かさつても、

奥は時雨の濃い雲の、次第に霧に薄くなつて、眉は迫つた、すす

き尾花の山の端は、巨はきな猪の横おおに寝た態いのししに似た、その猪の鼻と

言おう、中空なかぞらに抽出ぬきんでた、牙きばの白いのは湖である。丘を隔てて、

一条ひとすじ青いのは海である。

その水の光は、足許あしもとの地つちに影を映射うつして、羽織の栗梅くりうめが明あかる

く澄み、袖の飛模様も千鳥に見える。見ると、やや立離れた——
一段高く台を踏ふんで立った——糶せりうり売の親仁は、この小春日の真ま
んなか
中に、しかも夕月を肩に掛けた銅像に似ていた。

「あの煙突が邪魔だな。」

ここを入って行きましよう、同伴つれが言う、私設の市場の入口
で、外套氏は振返って、その猪ししの鼻の山裾やますそを仰いで言った。

「あれ、温泉よ。」

「温泉？」

「いま通って来たじゃありませんか、おじさん。」

「ああ、あの紺屋の物干場と向い合った……蟋蟀こおろぎがないていた

……」

蟋蟀は……ここでも鳴く。

「その紺屋だつて、あつたのは昔ですわ。垣も何にもなくなつて、いまは草場くさつばでしたわね。」

「そうだつけな——実は、あのならびに一人、おなじ小学校の組の友だちが居てね。……八田なにがし……」

「そのお飯まんまつぶ粒で蛙を釣つて遊んだつて、御執心の、蓮池やしきの邸の方とは違うんですか。」

鯛はまだ値が出来ない。山の端はすすきの薄はちまきに願巻を突合せて、あの親仁はまた反つた。

「違うんだよ。……何も更あらためて名のるほどの事もないんだけど、子供ツて妙なもので、まわりに田があるから、ああ八田だ、それ

にしても八ツはない。……そんなことを独り合点した事も思出しておかしいし、余り様子が變つているので、心細いようにもなつて、ついうっかりして——活動写真の小屋が出来た……がらんとしている、不景気だな、ときよつとして、何、昼間は休みなのだろう、にしておいたよ。そういえば煙突も真正面で、かえつて、あんなに高く見えなかつたもんだから、明取りあかりかと思つたつけ。……映画の明取りはちと變だね。どうかしている。」

と笑いながら、

「そうかい、温泉かい……こんな処に。」

「沸わかすんですよ……ただの水を。」

「ただの水はよかつた、成程。」

「でも、温泉といった方が景気がいいからですわ。そしてね、おじさん、いまの、あれ、むじな 貉の湯っていうんですよ。」

「貉の湯?……」

と同伴つれの顔を見た時は、もうその市場の裡なかを半ば過ぎていた。

まだ新しく、ほんの仮設らしい、通抜けで、ただ両側に店が並ん

だが、二三個処うつろに穴があいて、なぜかたんす 箆筒の抽斗ひきだしの一つ

足りないような気がする。今来た入はいりぐち口くちに、下駄屋と駄菓子屋

が向合つて、駄菓子屋に、ふかし芋と、ゆ 茹でたえんどう 豌豆えんどうを売るのも、

下駄屋の前ならびに、子供の履はきものの目立あかつてあか紅いのも、ものわび侘

しい。こんにやく 蒟蒻おけの桶ふなに、鮎ふなのバケツが並び、どじようざる 鱈どじようざるのざる笊ざるに、天秤てんびんを立

掛けたままの魚屋の裏羽目からは、あなめあなめ空地の尾花おぞがおぞ覗

いている……といった形。

——あとで地の理をよく思うと、ここが昔の蓮池の口もとだったのだそうである。——

「皆その御眷属ごけんぞくが売っているようだ。」

「何？ おじさん。」

「いえね、その貉の湯の。」

「あら聞こえると悪ござんすわ。」

とたしなめる目づかいが、つい横の酒類販売店の壇びんに、瞳が蝶のようにちらりと映って、レットルの桜に白い頬がほんのりする。

「決して悪く云ったのじゃない。……これで地じぐち行燈あんどんが五つ六つあってごらん。——横露地の初はつうま午まじやないか。お祭のようだ

と祝つたんだよ。」

「そんな事……お祭だなんのといつて、一口飲みたくなつたんじやあ、ありません？ おつかさん（外套氏の従姉をいう）ならですけど、可厭いやよ、私、こんな処で、腰掛けて一杯なんぞ。」

「大丈夫。いくら好きだつて、蕃とうがらし椒では飲めないよ。」
と言つた。

市場を出た処の、乾物屋と思う軒に、真紅まっかな蕃椒おびただが夥多おびただしい。……新聞ながら老舗しにせと見える。わかめ、あらめ、ひじきなど、磯いその香も芬ぶんとした。が、それが時雨でも誘いそうに、薄暗い店の天井は、輪にかがって、棒にして、揃えて掛けた、車くるま麩ぼで一杯であつた。

「見事なものだ。村芝居の天井に、雨車を仕掛けた形で、妙に陰気だよ。」

串戯じょうだんではない。日向ひなたに颯さつと村雨が掛かつた、薄すすきの葉摺はずれの音を

を立てて。――げに北国の冬空や。

二人は、ちよつとその軒下へ入つたが、

「すぐ晴れますわ、狐の嫁入よ。」

という、斜ななめに見える市場の裏羽目に添つて、紅蓼べにたでと、露草の

枯れがれに咲いて残つたのが、どちらがその狐火きつねびの小提灯こじょうちんだ

か、濡々ぬれぬれと灯ともれて、尾花せよに戦そよいで……それ動いて行く。

「そうか、私はまた狐の糸工場かと思つた。雨あしの白いのが、天井の車麩くるもから、ずらずらと降つて来るようじゃあないか。」

「可厭、おじさん。」

と振れるばかり、肩を寄せて、

「気味が悪い。」

「じゃあ、言直そう。ここは蓮池のあとらしいし、この糸で曼陀羅が織れよう。」

「ええ、だって、極楽でも、地獄でも、その糸がいけないの。」

「糸が不可いとは。」

「……だって、椎の木婆さんが、糸車を廻す処ですもの、小豆洗ともいうんですわ。」

後前を見廻して、

「それはね、城のお殿様の御寵愛の、その姉さんだったと言いま

してね。むかし、魔法を使うように、よく祈りのきいた、美しい巫女みこがそこに居て、それが使った貉だとも言うんですがね。」

あなたは知らないのか、と声さえ憚はばかってお町が言った。——この乾物屋と直角に向合むかいあって、蓮根れんこんの間屋がある。土間を広々と取り、奥を深く、森しんと暗い、大きな家で、ここを蓮根市はすいちとも呼ぶのは、その故だという。屋の棟を、うしろ下りに、山の中腹と
思う位置に、一朵いちだの黒雲の舞下ったようなのが、年数を知らない
椎の古木の梢こずえである。大昔から、その根に椎の樹婆ぼばしや又またというの
が居て、事々に異霊妖ようへん変あらを顕あらわす。徒然な時はいつも糸車を廻
わしているのだそうである。もともと私どもの、この旅客は、そ
の小学校友だちの邸とあとを訪うために来た。……その時分には遊

びに往来ゆききもしたろうものを、あの、椎の樹婆叉を知らないのかと、お町が更に怪しんで言うのであった。が、八ツや十ウのものを、わざと親たちは威おどしもしまい。……近所に古ふるむじな 貉いぬの居る事を、友だちは矜ほこりはしなかつたに違いない。

——町の湯の名もそれから起つた。——そうか、椎の木の犬いぬ、ふつた 経立ち貉、化婆ばば々々。

「あれえ。」

「……………」

「可いや厭、おじさんは。」

「あやまつた、あやまつた。」

鉄砲で狙ねらわれた川かわ 蟬せみのように、日のさす小雨を、綺麗な裾で

蓮の根へ飛んで遁にげた。お町の後から、外套氏は苦笑いをしながら、その蓮根問屋の土間へ追いついて、

「決して威おどす気で言ったんじやあない。——はじめは蛇かと思つて、ぞつとしたつけ。」

椎の樹婆又の話の聞くうちに、ふと見ると、天井の車麩からに擲あつて、ちよろちよると首と尾が躪あられた。その上う下えに巻いて廻るのを、蛇が伝う、と見るとともに、車麩がくるくると動くように、因果車うが畝ねつて通る。……で悚ぞ気つとしたが、熟じと視みると、鼠ねか、溝ど鼠ぶか、降る雨に、あくどく濡れて這はつている。……時も時だし、や、小さな貉が天井へ、とうっかり饒舌しやべつて、きれいな鳥を蓮池へ飛ばしたのであつた。

「そんな事に驚く奴があるものか。」

「だって、……でも、もう大丈夫だわ、ここへ来れば人間の狸たぬきが居るから。」

と、大きに蓮葉はすはで、

「権ちゃんごん——居るの。」

獣ならば目が二つ光るだろう。あれでも人が居るかと思う。透かして見れば帳場があつて、その奥から、大土間の内側を丸太で劃しきった——（朝市がそこで立つ）——その劃しきりの外側を廻つて、右の権ちゃん……めくら縞しまの筒袖つつぽを懐ふところ手で突張つつぽつて、狸より膾おつとせ膾せいに似て、ニタニタと蹶あられた。廓くるわの美人で顔がきく。この権ちゃんが蹶あられると、外土間に出張つた縁台に腰を掛けるの

に——市が立つと土足で糶せりあが上るのだからと、お町が手巾ハンケチでよく
 払はたいて、縁台に腰を掛けるのだから、じかに七輪しちりんの方がいい、
 そちこち、お八つ時分、薬罐やかんの湯も沸いていようと、遥はるかな台所口
 からその権ちゃんに持つて来させて、御挨拶は沢山……大きな坊
 やは、こう見えても人見知りをするから、とくるりと権ちゃんに
 背後うしろを向かせて、手で叩く真似をすると、えへへ、と権ちゃんの
 引ひっこ込んだ工合ぐあいが、印いんは結むすばないが、姉さんの妖術ようじゆつに魅かかつたよ
 うであつた。

通り雨は一通り霽あがつたが、土は濡れて、冷くて、翡翠かわせみの影が
 駒下駄すべをすべにすべつてまた映る……片棲かたづまはしより端折はしよりに、乾物屋の軒を伝つ

て、紅端緒べにはなの草履ではないが、ついと樂屋口へ行く状さまに、肩細く市場へ入ったのが、やがて、片手にビールの壘びん、と見ると片手に持った硝子盃コップが、光りを分けて、二つになつて並んだのは、お町さんも、一口つき合つてくれる気か。

「しやツ、しやツ。」

思わず糶せりごえ声を立てて、おじさんは、手を揚げながら、片手で外套の膝を叩いた。

「お手柄、お手柄。」

土間はたちまち春になり、花の蕾つぼみの一輪を、朧夜おぼろよにすかすごとく、お町の唇をビールで撓ためて、飲むほどに、蓮池のむかしを訪とう身には本懐とも言えるであろう。根を掘上げたばかりと思う、

見事な蓮根が柵の内、浄土の逆茂木。勿体ないが、五百羅漢の御腕を、組違えて揃う中に、大策に慈姑が二杯。泥のままのと、一策は、藍浅く、颯と青に洗上げたのを、ころころと三つばかり、お町が取って、七輪へ載せ、尉を払い、火箸であしらい、媚かしい端折のまま、懐紙で煽ぐのに、手巾で軽く髪の艶を庇つたので、ほんのりと珊瑚の透くのが、三杯目の硝子盃に透いて、あの、唇だか、その珊瑚だか、花だか、蕾だか、蕩然となる。

「町子嬢、町子嬢。」

「は。」

と頸の白さを、滑かに、長く、傾いてちよつと嬌態をやる。

「氣取つたな。」

「はあ。」

「一体こりやどういふ事になるんだい。」

「慈姑くわいの田楽、ほほほ。」

と、簪かんざしの珊瑚と、唇が、霞の中に、慈姑とは別に二つ動いて、

「おじさんは、小児こどもの時、お寺へ小僧さんにやられる処だったん

だつて……何も悪たれ坊ツてわけじゃない、賢くつて、おとなし

かつたから。——そうすりやきつと名僧知識になれたんだ。——

お母つかさんがそういつて話すんだわ。」

「悪かつたよ。その方がよかつたんだよ。相済まなかつたよ。」

今度は、がばがばと手酌つで注ぐ。

「ほほほほ、そのせいだから、精進男で、慈姑の焼いたのが大好きで、よく内へ来て頬張ったんだって……お母さんたら。」

「ああ、情ないなさけ。慈姑とは何事です。おなじ発心をしたにしても、これが鱒どじょうだと引導を渡す処だが、これじゃ、お念仏を唱えるばかりだ。——ああ、お町ちゃん。」

わざとした歎息を、陽気に、ふツと吹いて、

「……そういえば、一昨日おとといの晩……途中で泊った、鹿落かおちの温泉でね。」

「ええ。」

「実際、お念仏を唱えたよ、真夜半まよなかさ。」

「夜半よなか。」

と七輪の上で、火の氣に賑にぎやかな頬ほが肅然じつと沈しんんだ。

「……何、考えて見れば、くだらない事なんだが、鹿落は寂しい処だよ。そこを狙ったわけでもないが、来がけに一晩保養をしたがね。真北の海に向つて山の中腹にあるんだから、長い板廊下をつづらおり九十九折とつた形に通るんだ。——知っているかも知れないが。

——座敷は三階だったけれど、下からは四階ぐらいに当るだろう。晩飯いの烏賊いかと蝦えびは結構だったし、赤蜻蛉あかとんぼに海の夕霧で、景色もよかつたが、もう時節で、しんしんと夜の寒さが身に沁しみる。あすこいら一帯に、袖のない夜具だから、四布よのの綿わたの厚いのがごつおもたごつ重おもくつて、肩がぞくぞくする。枕まくらもと許あつかんへ熱爛あつかんを貰もらつて、硝子盃コップ酒ざけいの勢いきおいで、それでもぐつすり疲れて寝た。さあ何時頃だつ

たろう。何しろ真夜半だ。廁かわやへ行くのに、裏階うらばしご子を下りると、これが、頑丈な事は、巨巖おおいわを斫開きりひらいたようです。下りると、片側に座敷が五つばかり並んで、向うの端だけ客が泊つたらしい。ところが、次の間つきで、奥だけ幽かすかにももれていて、あとが暗い。一方が洗面所で、傍そばに大きな石の手水鉢ちようずばちがある、踏かがんで手を洗うように出来ていて、笕かけひで谿たにがわ河の水を引くらしい……しよろ、しよろ、ちやぶりと、これはね、座敷で枕にまで響いたんだが、風の声も聞こえない。」

「まあ……」

「すぐの、だだツ広い、黒い板の間の向うが便所なんだが、その洗面所に一つ電燈でんきが点ついているきりだから、いとどさえ夜ふけの

山氣にお圧されて、薄暗かつたと思つておくれ。」

「可い厭やあね。」

「止むを得ないよ。……實際なんだから。晩に見た心覚えでは、この間に、板戸があつて、一枚開いていたように思つたんだが、それが影もなかつた。思いちがいなんだろう。」

山霧の冷いのが——すぐ外は崖の森だし——窓から、隙間から、立て籠こむと見えて、薄い靄もやのようなものが、敷居に立つて、それに木目がありそうに見える。ところで、穿はいた草履が、笹ささ葉つばでも踏む心こころ持もちにバサリとする。……暗い中に、三つ並んでいるんです。」

「あの、鹿落。」

と、瞳を凝らした、お町の眉に、その霧が仄ほのかにうつつた。

「三階の裏階子を下りた処だわね、三つ並んだ。」

「どうかしたかい。」

「どうして……それから。」

お町は聞返して、また息を引いた。

「その真まんなか中の戸が、ボタン……と。」

「あら……」

「いいえさ、怯おどかすんじゃない。そこで、いきなり開いたんだと、余計驚いたろうが——開いていたんだよ。ただし、開いていた、その黒い戸の、裏棧に、白いものが一ひとすじ条、うねうねと伝つたわっている。」

「……………」

「どこからか、細目に灯あかりが透くのかしら？……その端の、ふわりと薄うすひら匾はつたい処へ、指が立って、白く匆はねて、動いたと思うと、すツと扉とが閉しまった。招いたような形だが、串じょうだん戯だんじゃあない、人が行つたので閉めたのさ。あとで思つてもまつたく色が白かつた、うつくしい女の手だよ——あ、どうした。」

その唇が、眉とともに歪ゆがんだと思うと、はらりと薰つて、胸に冷ひやり、円まるまげ鬚ハシケチの手巾の落ちかかる、一重ひとえだけは隔てたが、お町の両の手が、咄とつさ嗟さに外套の袖をしごくばかりに引ひき搦つかんで、肩と袖で取とり縫すった。片棲の襦袢が散つて、山茶花さざんかのようにこぼれた。この身動みじろぎに、七輪の慈姑くわいが転くげて、コンと向うへ飛んだ。一ひ

個とつは、こげ目が紫立たつて、蛙ひの人魂ひとたまのように暗い土間に尾さえ曳ひく。

しばらくすると、息つぎの麦酒ビールに、色を直して、お町が蛙の人魂の方を自分で食べ、至極尋常なのは、皮を剥はがして、おじさんに振舞はつたくらいであるから。——次の話が、私はじめ、読者諸君も安心して聞くことを得るのである。

一体、外套氏が、この際、いまの鹿落の白い手を言出したのは、決して怪談がかりに娘を怯おどかすつもりのもものではなかった。近間ではあるし、ここを出たら、それこそ、ちちろ鳴く虫が糸を繰る音ねに紛れる、その椎樹しいのき——（釣瓶つるべおろし）（小豆あずきとき）などい

う怪ばけものは伝統的につきものの——樹の下を通つて見たかつた。
 車くるま 麩まぶの鼠ねずみに怯おびえた様子では、同行を否定されそうな形勢だつた
 処から、「お町さん、念仏を唱えるばかり吃びっくり驚おどろした、廁かわやの戸の
 白い手も、先へ入つていた女が、人影に急いで扉とを閉めただけの
 事で、何でもないので。」と、おくれ馳ばせながら、正体見たり枯
 尾花流に——続いて説明に及ぶと、澄んで沈んだ真顔まんなかになつて、
 鹿落の旅館の、その三つ並んだ真まんなか中の廁かわやは、取壊して今はない
 筈はずだ、と言つて、先手に、もう知つている。……

はてな、そういえば、朝また、ようをたした時は、ここへ白い
 手が、と思う真中のは、壁が抜けて、不状ふざまに壊れて、向うが藪やぶ
 畳たたみになつていたのを思出す。……何、昨夜ゆうべは暗がりで見損みそこな

つたにして、一向気にも留めなかつたのに。……

ふと、おじさんの方が少し寒気立つて、

「——そういえば真まんなか中のはなかつたよ、……朝になると。……

じやあ何か仔細わけがあるのかい。」

「おじさん——それじや、おじさんは、幽霊を、見たんですね。」

「幽霊を。」

「もう私……気味が悪いの、可厭いやだなぞつて、そんな押退おしのけるよ
うなこと言えませんわ。あんまり可哀想な方ですもの。それはね、
あの、うぐい（）亭——ずツと河上の、川魚料理……ご存じで
しょう。」

「知ってるとも。——現在、昨日きのうの午餉ひるはあすこで食べたよ。閑

静で、落着いて、しんみりして佳い家だが、そんな幽霊じみた事はいささかもなかつたぜ。」

「いいえ、あすこの、女中なかいさんが、鹿落の温泉でなくなつたんです。お藻代もよさんという、しとやかな、優しい人でした。……おじさん、その白い、細いのは、そのお藻代さんの手なんですよ。」

「おどかしなさんない。おじさんを。」と外套氏は笑つたが。

——今年余寒の頃、雪の中を、里見、志賀の両氏が旅して、新潟の鍋茶屋なべぢやなどと併ならび称せらるる、この土地、第一流の割烹かつぼうで一酌し、場所をかえて、美人に接した。その美人たちが、河上の、うぐい亭へお立寄り遊ばしたか、と聞いて、その方が、なお、

お土産になりますのに、と言つたそうである。うぐい亭の存在を云しかい爾うために、両家かの名を煩わしたに過ぎない。両家はこの篇には、勿論、外套氏と寸毫すんごうのかかわりもない。続いて、仙女香、江戸の水のひそみに倣ならつて、私が広告を頼まれたのでない事も断つておきたい。

近頃は風説うわさに立つほど繁昌はんじょうらしい。この外套氏が、故郷に育つ幼い時分ころには、一度ほとんど人氣ひとけの絶えるほど寂れていた。町の場合から、橋を一つ渡つて、山の麓ふもとを、五町ばかり川添かわぞいに、途中、家のない処ゆを行くので、雪にはいうまでもなく埋うずもれる。平家づくりで、数奇すきな亭構ちんがまえで、笈かけひの流れ、吹上げの清水、藤棚などを景色に、四つ五つ構えてあつて、通いは庭下駄で、おも

屋から、その方は、山の根に。座敷は川に向つてゐるが、すぐ磧かわらで、水は向う岸を、藍あゐに、蒼あおに流れるのが、もの静かで、一層床しい。籬まがきほどもない低い石垣を根に、一株、大きな柳があつて、幹ななめを斜ななめに磧へ伸びつつ、枝は八方へ、座敷の、どの窓も、廂ひさしも、蔽おおうばかり見事に靡なびいてゐる。月には翡翠ひすいの滝の糸、雪には玉の簾すだれをつらつらを聯ねよう。

それと、戸かど前さきが松原で、抽ぬきんでた古木もないが、ほどよく、暗くなく、あからさまならず、しつとりと、松葉を敷いて、松毬まつかさまじりに搔かき分けた路も、根を畝うねつて、奥が深い。いつも松露の香がたつようで、実際、初はつ茸たけ、しめじ茸は、この落葉あじろに生えるのである。入口に萩の枝折戸しおりど、屋根なしに網代の扉とがついてゐる。

また松の樹を五株、六株。すぐに石ころ道が白く続いて、飛地の
 ような町屋の石を置いた板屋根が、山裾に沈んで見えると、そこ
 にその橋がある。

蝙蝠こうもりに浮かれたり、螢ほたるを追ったり、その昔子供等は、橋まで

来るが、夜は、うぐい亭の川岸は通り得なかつた。外套氏のいう

処では、道の途中ぐらい、麓ふもとの出張つた低い磧かわらの岸に、むしろが

こいの掘立小屋ほったてごやが三つばかり築やなの崩れたようなのがあつて、古俳

句の——短夜みじかよや（何とかして）川手水かわちようす——がそつくり想出さ

れた。そこが、野三昧のざんまいの跡とも、山窩さんかが甘い水を慕つて出て来

るともいう。人の灰やら、犬の骨やら、いずれ不気味なその部落

を隔てた処に、幽かすかにその松原が黒く乱れて梟ふくろが鳴いているお茶屋

だった。——うぐい^{うぐい}は^{はや}、鯰^{ごり}、鮠^{はや}の類は格別、亭で名物にする一尺の岩魚^{いわな}は、娘だか、妻女だか、艶^{えん}色^{しよく}に懸相^{けそう}して、獺^{かわおそ}が件の柳の根に、鰭^{ひれ}ある錦^{にしきぎ}木にするのだと風説^{うわさ}した。いささか、あやかしがついでいて、一層寂れた。鶉^うの啣^{くわ}えた鮎^{あゆ}は、殺生ながら賞^{しょう}翫^{がん}しても、獺の抱えた岩魚は、色恋といえども気味が悪かったものらしい。

今は、自動車さえ往来^{ゆきき}をするようになって、松蔭の枝折戸まで、つきの女中が、柳なんぞの縞^{しま}お召^{ひとなつこ}、人^{ひと}懐^{なつか}く送^{おく}つて出て、しとやかな、情のある見送^{みおく}りをする。ちようど、容子^{ようす}のいい中年増^{ちゆうねうぞう}が給仕^{きよし}に当^{あた}つて、確^{たしか}に外套^{がいとう}氏がこれは体験^{たいけん}した処^{ところ}である。ついでに岩魚の事を言おう。瀬波^{せな}に翻^{ひるが}える状^{さま}に、背尾^{せび}を刎^はねた、皿^{しら}に余^ある

尺ばかりな塩焼は、まったく美味である。そこで、讚歎すると、上流、五里七里の山奥から活いきのまま徒歩で運んで来る、山やま爺じいの一人なぞは、七十を越した、もう五十年余りの馴染なじみだ、と女中が言った。してみると、おなじ獺おそでも山獺が持参するので、伝説は嘘でない。しかし、お町の——一説では、上流五里七里の山奥から山爺は、——どの客にも言うのだそうである。

水と、柳のせいだろう。女中は皆美しく見えた。もし、妻女、娘などがあつたら、さぞ妍けん艶えんであろうと察しらるる。

さて、「いらして、また、おいで遊ばして」と枝折戸でいう一種綿々たる余韻の松風に伝う挨拶は、不思議に嫺じょう々じょうとして、客は青柳に引戻さるる思おもがする。なお一段と余情のあるのは、日

が暮れると、竹の柄の小提灯で、松の中の径を送出すのだそうである。小棲の色が露に^{すべ}に^{なまめ}つて、こぼれ松葉へ映るのは、どんなにか媚かしかろうと思う。

「——お藻代さんの時が、やっぱりそうだったんです。それに、もう十時すぎだったというんです。」

五年前、^{ぜん}六月六日の夜であった。明直に言えば、それが、うぐい亭のお藻代が、白い手の幻影^{まぼろし}になる首途^{かどで}であった。

その夜、松の中を小提灯で送り出た、中京、名古屋の一客——畜生め色男——は、枝折戸口で別れるのに、恋々としてお藻代を強いて、東の新地——^{くるわ}廓の待合、^{あけぼの}明保野という、すなわちお町の

家^{うち}まで送^うつて来^きさせた。お藻代は、はじめから、お町の内に馴染^{なじみ}ではあつたが、それが更^{あらた}めて深い因縁になつたのである。

「あの提灯が寂しいんですわ……考えてみますと……雑で、白^{しらは}張^りのようなんですもの。」——

「うぐい。」——と一面——「亭」が、まわしがきの裏にある。ところが、振向け方で、「うぐい」だけ黒く浮いて出ると、お経ではない、あの何とか、梵^{ほんじ}字とかのようで、卵塔場の新墓^{とも}に灯^{とも}れたいそうに見えるから、だと解^とく。——この、お町の形象学は、どうも三世^{さんぜ}相^{そう}の鼈^べ頭^{とう}にありそうで、承服^{じやうふく}しにくい。

それを、しかも松の枝に引掛^{ひっか}けて、——名古屋の客が待つていた。冥途^{めいど}の首途^{かたで}を導くようじやありませんか、五月闇^{さつきやみ}に、その白提灯を、ぼつと松林の中に、という。……成程、もの寂しきは、もの寂しい……

話はちよつと前後した——うぐい亭では、座つきに月雪花。また少々慾張^{よくば}つて、米俵^{ちようじ}だの、丁字^{ちようじ}だの、そうした形の落雁^{らくがん}を出す。一枚^{ひとつ}ずつ、女の名が書いてある。場所として最も近い東の廓^{くわく}のおもだった芸妓^{げいしや}連が引札^{ひきふだ}がわりに寄進^{ひきふだ}につくのださうで。勿論、かけ離れてはいるが、呼べば、どの妓^{おんな}も三味線^{さみせん}に応ずると言う。その五年前、六月六日の夜——名古屋の客は——註^{しゆ}しておくが、その晩以来、顔馴染にもなり、音信^{おとずれ}もするけれども、そ

の姓名だけは……とお町が堅く言わないのだそうであるから、ただ名古屋の客として。……あとを続けよう。

「——みんな、いい女らしいね。見た処。中でも、俵のなぞは嬉しいよ。ここに雪形に、もよ、というのは。」

「飛んだ、おそまつでございます。」

と白い手と一所に、銚子ちようしがしなうように見えて、水色の手絡てがらの円まるまげ鬚まげが重そうに俯向うつむいた。——嫋なよやかな女だというから、その容ようす子は想像に難くない。欄干らんかんに青柳の枝しだ垂たるる裡なかに、例の一寸の岩魚いわな。と蓴菜しゆんさいの酢味噌くすみ。胡桃くるみと、飴煮あめにの鮓ごりの鉢めさき、鮓ごりとせん牛蒡ごぼうの椀わんなど、膳ぜんを前にした光景めさきが目前めさきにある。……

「これだけは、密そつと取りのけて、お客様には、お目に掛けませんのに、どうして交まじっていたのでございましょうね。」——

「いや、どうもその時の容ようす子すと云いつたら。」——

名古屋の客は、あとで、廓の明保野で——落雁で馴染なじの芸妓を二三人一座に——そう云いつて、燥はしやぎもしたのださうで。

落雁を寄進の芸妓連が、……女中頭ではあるし、披ひろ露ろめのためなんだから、美しく婀娜あだなお藻代もしろの名だけは、なか間の先頭にかき込んでおくのであった。

——断きるまでもないが、昨日きのうの外あ衣い氏しの時の落雁には、もはやお藻代もしろの名だけはなかつた。——

さて、至極古風な、字のよく読めない勘定がきの受取が済んで、そのうぐい提灯で送つて出ると、折戸を前にして、名古屋の客が動かなくなつた。落雁の芸妓を呼びに廓へ行く。是非送れ、お藻代さん。……一見は利かずとも、電話で言込めば、と云つても、威勢よく酒の機嫌で承知をしない。そうして、袖たけの松の樹のように動かない。そんな事で、誘われるような婦おんなではなかつたのに、どういう縁か、それでは、おかみさんに聞いて許しを得て。……で、おも屋に引返したあとを、お町がいう処の、墓はかしよ所の白張あかりのような提灯を枝にかけて、しばらく待つた。その薄い灯で、今度は、蕈きのこが化けた状さまで、帽子を仰向けあおむに踞しゃがんでいて待つ。

やがて、出て来た時、お藻代は薄化粧をして、長襦ながじゆばん袷あを着換

えていた。

その長襦袢で……明保野で寝たのであるが、朱鷺色ときいろの薄いのに雪輪を白く抜いた友染である。径みちに、ちらちらと、この友染が、小提灯で、川風が水に添い、野茨のぼら、卯うの花。且つちり乱るる、山裾の草にほのめいた時は、向瀬むこうせの流れも、低い磧かわらの撫子なでしこを越して、駒下駄に寄つたろう。……

風が、どつと吹いて、蓮根市の土間は廂ひさしさが下さりに五月さつき闇やみのように暗くなつた。一雨来よう。組合わせた五百羅漢の腕が動いて、二人を抱かかえ込みこみそうである。

どうも話が及およびびしし腰こしになる。二人でその形に、並んで立つても

らいたい。その形、……その姿で。……お町さんとかも、褌端折をおろさずに。——お藻代も、道芝の露に裳もすそを引揚げたというのであるから。

一体黒い外套氏が、いい年をした癖に、悪く色気があつて、今しがた明保野の娘が、お藻代の白い手に怯おびえて取絶つた時は、内々で、一抱やわらき柔かな胸だきこを抱込んだらう。……ばかりでない。はじめ、連立つて、ここへ庭樹の多い士族町を通る間に——その昔、江戸護持院ヶ原の野のぼとけ 仏おぼだった地藏様が、負おぶわれて行こう……と臑おぼろ夜くつきようにニコリと笑つて申されたを、通りがかつた当藩三百石、究くつきよう 竟の勇士が、そのまま中仙道北陸道を負おぶい通いて帰国した、と言伝えて、その負なかくぼさりたもうた腹部の中みたく 窪じようみな、御丈、丈

余よの地藏尊を、古ふる邸やしきの門内に安置して、花筒に花、手水鉢に柄杓ひしゃくを備えたのを、お町が手つきに案内すると、外套氏が懐しそうに拝んだのを、嬉しがって、感心して、こん度は切殺された、城のお妾めかけさん——のその姿で、縁切り神さんが、向うの森の祠ほこらにあるから一所に行こうと、輿に乗じた時……何といった、外套氏。——「縁切り神様は、いやだよ、二人して。」は、苦々しい。

だから、ちよつとこの子をこう借りた工合ぐあいに、ここで道行きの道具がわりに使われても、憾うらみはあるまい。

そこで川通りを、次第に——そうそうそう肩を合わせて歩行あるい

たとして——橋は渡らずに屋敷町の土塀を三曲りばかり。お山の妙見堂の下を、たちまち明るい廓へ入つて、しかも小提灯のまま、客の好みの酔興な、燈籠とうろうの絵のように、明保野の入口へ——そこで、うぐいの灯が消えた。

「——藤紫の半襟が少しはだけで、裏を見せて、織ほっそり肌襦袢の真紅なのが、縁の糸とかの、燃えるように、ちらちらして、静しずまふたに瞼たてこを合わせていた、お藻代さんの肌の白いこと。……六畳は立籠たてこめであるし、南風みなみけ気で、その上暖か過ぎたでしょう。鬢びんの毛がねつとりと、あの気味の悪いほど、枕に伸びた、長い、ふつくりしたのどへまつわつて、それでいて、色が薄うっすりと蒼あおいんですつて。：

…友染の夜具に、裾は消えるように細りしても——寝乱れよ、おじさん、家業で芸妓衆げいしやしゆのなんか馴なれていても、女中だつて堅い素人なんでしょう。名古屋の客に呼ばれて……お信のぶ——ええ、さつき私たち出しなに駒下駄を揃えた、あの銀杏いちようがえし返の、内のあの女中ですわ——二階廊下を通りがかりにね、（おい、ねえさんか、湯を一杯。）……

（お水ひやを取かえて参りましょうか。）枕頭まくらもとにあるんですから。（いや、熱い湯だ。……時々こんな事がある。飲過ぎたと見えて寒気がする。）……これが襖越ふすましのやりとりよ。……

私？……私は毎朝のように、お山の妙見様へお参りに。おつかさんは、まだ寢床に居たんです。台所の薬罐ゆわかしにぐらぐら沸たぎつたの

を、銀の湯沸ゆわかに移して、塗盆で持つて上つて、（御免遊ばせ。）中庭の青葉が、緑の霞に光つて、さし込む裡なかに、いまの、その姿でしよう。——馴なれない人だから、帯も、扱しご帯も、羽衣むしでもつたように、ひき乱れて、それも男の手で脱がされたのが分ります。——薄とい朱鷺ときいろ色、雪輪なんですもの、どこが乳だか、長襦袢だか。——六畳だし……お藻代さんの顔の前、枕まではゆきにくい。お信が、ぼうとなつて、入口に立ちますとね、（そこへ。）と名古屋の客がおつしやる。……それなりに敷蒲団しきぶたんの裾へ置いて来たそうですか。」

外套氏は肩をすくめた。思わず危険を予感した。

「名古屋の客が起上りしな、手を伸ばして、盆ごと取つて、枕頭

へ宙を引くトタンに塗盆すべを亘わたつたんです。まるで、黒雲の中から白い猪が火を噴いて飛とび菟かる勢いきおいで、お藻代さんの、恍うつつ惚とりしたその寝顔へ、蓋ふたも飛んで、仰あおむ向けに、熱湯が、血ですか、蒼い鬼火でしようか、玉をやけば紫でしようか……ばつと煮えた湯気が立つたでしよう。……お藻代さんは、地獄の釜かまで煮られたんです。あの、美しい、鼻も口も、それツきり、人には見せず……私たちも見られません。」

「野郎はどうした。」

と外套氏の膝こぶしの拳こぶしが上った。

「それはね、ですが、納得な得とずくです。すつかり身支度しをして、客は二階から下りて来て——長火鉢の前へ起きて出た、うちの母の

前へ、きちんと膝に手をついて、

（——ちよつと事件が起りました。女は承知です。すぐ帰りますから。）——

分外なお金子かねに添えて、立派な名刺を——これは極秘に、と云つてお出しなすつたそうですが、すぐに式台へ出なさいますから、（ちよつとどうぞ、旦那。）と引留めて置いて、まだ顔も洗わなかつたそうですけれど、トントンと、二階へ上つて、大急ぎで廊下を廻めぐつて、襖ふすまの外から、

（——夫人おくさん——）

ひっそりしていたそうです。

（——夫人さん、旦那様はお帰りになりますか。——）

ものに包まれたような、ふくみ声で、

(いらして、またおいであそばして……) ——

と、震えて、きれぎれに聞こえたつて言います。

おじさん、妙見様から、私が帰りました時はね、もう病院へ、

母がついて、自動車で行ったあとです。お信たちのいうのでは、

玉子色の絹の手巾ハンケチで顔を隠した、その手巾が、もう附着くっいてい

て離れないんですつて。……帯をしめるのにも。そうして手巾に

(もよ)と紅糸あかいとで端縫はしぬいをしたのが、苦痛にゆがめて噛緊かみめる

唇が映つて透くようで、涙は雪が溶けるように、頸脚えりあしへまで落

ちたと言います。「

「不可いけない……」

外套氏は、お町の顔に当てた手巾を慌しく手で払った。

雨が激しく降って来た。

「……何とも申様がない……しかし、そこで鹿落の温泉へは、療治に行つたとしてもいうわけかね。」

「湯治だなんのつて、そんな怪我ではないのです。療治は疾うに済んだんですが、何しろ大變な火傷やけどでしょう。ズツと親もとへ引込んでいたんですが、片親です、おふくろばかり——外へも出ません。私たちが行つて逢う時も、目だけは無事だったそうですけれども、すみの目金をかけて、姉さんねえかぶりをして、口にはマスクを掛けて、御経を習っていました。お客から、つけ届けはちやんとありますが、一度来るといって、一年たち三年たち、……も

つとも、沸湯にえゆを浴びた、その時、（——男を一人助けて下さい。……見継ぎは、一生する。）——両手をつけて、言っただんですつて。

お藻代さんは、ただ一夜ひとよの情で、死んだつもりで、地獄の釜で頷うなずいたんですね。ですから、客の方で約束は違えないんですが、一生飼殺し、といった様子でしょう。

旅行たびはどうしてしたでしょう。鹿落の方角です、察しられますわ。霜月でした——夜汽車はすいていますし、突伏つつぶしてでもいれば、誰にも顔は見られませんの。

温泉宿でも、夜汽車について、すぐ、その夜半よなかだったんですつて。——どこでもいうことでしょうか？ 三つ並んだはばか

りの真中へは入るものではないとは知っていたけれども、誰もまんなか入るものがないのを、かえつて、たよりにして、夜ふけだし、そこへ入つて……情ないわけねえ。……鬱陶なさけしい目金も、マスクも、やつと取つて、はばかりの中ですよ。——それで吻ほっとして、おおきはしごだん大な階子段の暗いのも、巖山いわやまを視めるように珍らしく、手ちよう水鉢ずばちに筧かけひのかかった景色なぞ……」

「ああ、そうか。」

「うぐい亭の庭も一所に、川も、山も、何年ぶりか、久しぶりで見る気がして、湯ざめで冷くなるまで、覗のぞいたり、見廻したり、可哀想じやありませんか。

——かきおきにあつたんです——

ハツと手をのばして、戸を内へ閉めました。不意に人が来たんですね。——それが細い白い手よ。」

「むむ、私のような奴だ。」

と寂しく笑いつつ、毛肌になつて悚ぞつとした。

「ぎやつと云つて、その男が、凄すさまじい音で顛ひっくりかえ動返つてしまった

んですつてね。……夜番は駆けつけますわ、人は騒ぐ。気の毒さも、面目なさも超越して、ひけめのあるのは大火傷の顔のお化でしょう。」

もう身も世も断あきら念めて、すぐに死場所の、……鉄道線路へ……」

「かわや廁からすぐだろうか。」

「さあね、それがね、恥かしさと死ぬ気の、一念で、突き破つた

んでしようか。細い身体からだなら抜けられるくらい古壁は落ちていた
そうですけど、手も浄きよめずに出たなんぞつて、そんなのは、お
藻代さんの身に取つて私は可い厭や。……それだどこで遺書かきおきが出
来ます。——轢ひかれたのは、やっと夜の白よみかかった時だつてい
うんですもの。もつとも（幽かすなお月様の影をたよりに）そうかい
てもあるんですけれども。一旦座敷へ帰つたんです。一生懸命、
一大事、何かの時、魂も心も消えるといえ、姿だつて、消えま
すわ。——三枚目の大男の目をまわしているまわりへ集まつた連
中の前は、霧のように、スツと通つて、悠然と笕で手水をしたで
しょう。」

「もの凄すげい。」

「でも、分らないのは、——新聞にも出ましたけれど、ちやんと裾腰すそごしのたしなみはしてあるのに、衣きものは、肌まで通つて、ぐつしより、ずぶ濡れだったんですつて。……水ごりでも取りましたか、それとも途中の小川へでも落ちたんでしようか。」

「ああ、縁台が濡れる。」

と、お町の手を取つて、位置を直して、慎重に言った。

「それにね、首……顔がないんです。あの、冷いほど、真白まっしろな、乳も、腰も、手足も残して。……微塵みじんに轢ひかれたんでしよう。血の池で、白魚が湧わいたように、お藻代さんの、顔だの、頬だのが、堤防どてを離れた、電信のはりがねの上の、あの辺……崖さかの中途のまっく椎しいの枝に、飛上つた黒髪が——根をくるくると巻いて、倒さかに真まっく

黒ろな小こ蓑みのを掛けたようになって、それでも、優しい人ですから、すんなりと朝露に濡れていました。それでいて毛筋をつたわって、落ちしずくる雫たが下へ溜たまって、血だつたそうです。」

「寒くなつた。……出ようじゃないか。——ああ西日が当たると思つたら、向うの蕃とう椒がらしか。慌あわてている。が雨は霽あがつた。」

提灯なしに——二人は、歩ある行き出した。お町の顔の利くことは、いつの間にか、蓮根の中へ寄掛けて、傘が二本立掛けてあるのを振返つて見たので知れる。

「……あすこに人が一人立っているね、縁台を少し離れて、手摺てすりに寄より掛かつて。」

「ええ、どしや降りの時、気がつきましたわ。私、おじさんの影

法師かと思つたわ。——まだ麦酒ビールがあつたでしよう。あとで一口めしあがるなぞは、洒落しゃれてるわね。」

「何だ、いま泣いた鳥がもう出て笑う、というのは、もうちと殊勝な、お人柄の事なんだぜ。私はまた、なぜだか、前刻さつきいった——八田——紺屋の干場の近くに家うちのあつた、その男のような気がしたよ。小学校以来。それだつて空くうな事過ぎるが、むかし懐かしさに、ここいら歩行あるかないとは限らない。——女づれだから、ちよつと言ことばを掛けかねたろう。……

それだと、あすこで一杯やりかねない男だが、もうちと入組んだ事がある。——鹿落を日暮方出て此地ここへ来る夜汽車の中で、目の光る、陰気な若い人が真向まむこうに居てね。私と向い合うと、立掛

けてあつた鉄砲——あれは何とかいう猟銃さ——それを縦に取つて、真しんちゆう鍬くわの蓋ふたを、コツコツ開けたり、はめたりする。長い髪の毛を一振りながら、（猟師と見えますか。）ニヤリと笑つて、（フフン、世を忍ぶ——仮装ですよ。）と云つてね。袋から、血だらけな頬ほお白しろを、（受取つてくれたまえ。）——そういつて、今度は銃を横へ向けて撃うち鉄がねをガチンと掛けるんだ。（鹿そは葉はだが、いかがです。）——貫くわいものじゃあるが葉卷を出すと、目を見据えて、（贅ぜいたく沢たくなものをやりますな、僕は、主義として、そういうものは用いないです。）またそういつて、撃鉄をカチツと行やる。貫くわいものの葉卷を吹かすより、霰さん弾だんで鳥をばらす方が、よっぽど贅ぜ沢たくじゃないか、と思つたけれど、何しろ、木胴きどう鉄てつ胴どうから

くり洞鳴つて通る飛団子、と一所に、トンネル隧道を幾つも抜けるんだからね。要するに仲蔵以前の定九郎だろう。

そこで、小鳥の回向料えこうりょうを包んだのさ。

十時四十分頃、二つさきの山の中の停車場へ下りた。が、別れしなたもとに、袂たもとから名札を出して、寄越よこそうとして、また目を光らして引込ひっこめてしまった。

——小鳥は比羅びらのようなものに包んでくれた。比羅は裂いて汽車の窓から——小鳥は——包み直して宿へ着いてから裏の川へ流した。が、眼張魚めばるは、墓ひきだがえることわざと諺ことわざに言うから、血の頬白うぐいは、うぐいになろうよ。——その男のだね、名刺に、用のありそうな人物が、何となく、立っていたんじゃないかとも思ったよ。」

家業がら了解わかりは早い。

「その向むきの方なら、大概私が顔見知りよ。……いいえ、盗賊どろぼうや風俗の方ばかりじゃありません。」

「いや、大きに——それじゃ違つたろう。……安心した。——時に……実は椎の樹を通つてもらおうと思つたが、お藻代さんの話のいまだ。今度にしようか。」

「ええ、どちらでも。……ですが、もうこの軒を一つ廻つた塀外が、じきその椎の樹ですよ。棟に蔭がさすでしょう。路地の暗いのもそのせいですわ。」

「大きな店らしいのに、寂ひっそり寞そりしている。何屋だろう。」

「有名な、湯葉屋です。」

「湯葉屋——坊主になり損そこなった奴の、慈姑くわいと一所に、大好きなものだよ。豆府の湯へ箱形の波を打って、皮が伸びて浮く処をすくい上げる。よく、東の市場で覗のぞいたつけ。……あれは、面白い。」

「入ってみましょう。」

「障子は開いている——ははあ、大きな湯の字か。こん度は映画と間違えなかつた。しかし、誰も居ないが、……可いいかい。」

「何かいったら、挨拶をしますわ。ちよつと参観に、何といいましよう、——見学に、ほほほ。」

掃清めた広い土間に、惜おしいかな、火の気がなくて、ただ冷たい室むろだった。妙に、日の静寂しじま間だったと見えて、人の影もない。窓の並んだ形が、椅子をかたづけけた学校に似ていたが、一列に続い

て、ぎつと十台、かねじやく曲尺に隅を取つて、また五つばかり銅の角鍋が並んで、中に液体だけは湛たたえたのに、青桐あおぎりの葉が枯れつつ映つていた。月も十五に影を宿すであろう。出ようとすると、向うの端から、ちらちらと点ついて、次第に竈かまどに火が廻つた。電気か、瓦斯がすを使うのか、ほとんど五彩である。ぱつと燃えはじめた。

この火が、一度に廻ると、カアテンを下ろしたように、窓が黒くなつて、おかしな事には、立っている土間にひだを打つて、皺しわが出来て、濡色つやに光沢が出た。

お町が、しっかりと手を取つた。

背後うしろから、

「失礼ですが、あなた貴方……」

前刻さつぎの蓮根市はすいちの影法師が、旅装で、
 白晳はくせきの紳士になり、且つ
 指環ゆびわを、竈かまどの火に彩られて、
 顕あらわれた。

「おお、これは。」

名古屋に時めく大資産家の婿君で、某学校の教授と、人の知る
 ……すなわち、以前、この蓮池邸はすいけやしきの坊ちやんであつた。

「見覚えみなめがおありでしょう。」
 と斜ななめに向つて、お町にいつた。

「まあ。」

時めく婿は、帽子ソフトを手にして、

「後刻、お伺いする処でした。」

驚破す、再び、うぐい亭の当夜の嫖客ひょうかくは——渠かれであつた。

三人のめぐりあい。しかし結末にはならない。おなじ廓へ、第
 一步、三人のつまさきが六つ入交いれまじった時である。

落葉のそよぐほどの、登音あしおともなしに、曲尺かねじゃくの角を、この

工場から住居へすまい続くらしい、細長い、暗い土間から、白髪しらががすく

すくと生えた、八十を越えよう、目口も褐漆かつしつに干からびた、脊

の低い、小さな媪ばあさんが、継はぎの厚い布子ぬのこで、腰をかが屈めて出て

来た。

蒼白まつさおになって、お町があとへ引いた。

「お姥ばあさん、見物をしていますよ。」

と鷹揚おうように、先代の邸主は落おちついて言った。

何と、媪ばあは頤あごをしゃくつて、指二つで、目を弾はじいて、じろりと

見上げたではないか。

「無断で、いけませんでしたかね。」

外套氏は、やや妖変ようへんを感じながら、丁寧ていねいに云ったのである。

「どうなとせ。」

唾つばと泡かみあが囁ささや合うように、ぶつぶつと一言ひとこといったが、ふ、ふふ

ん、と鼻の音をさせて、膝の下へ組手のまま、腰を振つて、さあ、たしか鍋なべの列のちょうど土間へ曲角の、火の氣かの赫かつと強い、その鍋の前へ立つと、しゃんと伸びて、肱ひじを張り、湯氣のむらむらと立つ中へ、いきなり、くしゃくしゃの顔を突つ込んだ。

が、ぱつと音を立てて引抜いた灰汁あくの面つらと、べとりと真黄色まつきいろに附着くっいた、豆腐の皮と、どっちの皺しわぞ！ 這はつたように、低く

踞しゃがんで、その湯葉の、長い顔を、目鼻もなしに、ぬつと擡もたげた。

口のあたりが、びくりと動き、苔こけの青い舌を長く吐いて、見よ、べろべろと舐なめ下ろすと、湯葉は、ずり下さがり、めくれ下おり、黒い目金と、耳までのマスクで、口が開いた、その白い顔は、湯葉一枚を二倍にして、土間の真まんなか中に大きい。

同時に、蛇のように、再び舌が畝うねつて舐め廻すと、ぐしやぐしやと顔一面、山女あけびを潰つぶして真赤まっかになった。

お町の肩を、両手でしつかとしめていて、一つ所に固かたまった、我が足がよろめいて、自分がドシンと倒れたかと思う。名古屋の客は、前のめりに、近く、第一の銅鍋の沸上った中へ面おもてを擦おして突つ伏つぶした。

「あッ。」

片手で袖を握つかんだ時、布子の裾のこわばった尖端とっさきがくるりと
 匆はねて、媪ばばあの尻が片隅へ暗くかくれた。竈かまどの火は、炎を潜めて、
 一いつとき時に皆消えた。

同時に、雨がまた迫るように、窓の黒さが風に動いて、装もり上
 つたように見透かさるる市街に、暮早き電燈の影があかく立つて、
 銅あかがねの鍋は一つ一つ、稲妻に似てぴかぴかと光った。

足許も定まらない。土間の皺しわが裂けるかと思う時、ひいても離
 れなかつた名古屋の客の顔が、湯気を飛ばして、辛うじて上ると
 ともに、ぴちぴちと魚うおのごとく、手足を匆はねて、どつと倒れた。
 両腋を抱いて、抱起した、その色は、火の皮の膨れた上に、爛ただれが

紫の皺を、波打って、動いたのである。

市のあたりいちの人声、この時賑にぎやかに、古椎ふるしいの梢こずえの、ざわざわと鳴る風なまぐさの腥蕈なまぐささ。

——病院は、ことさらに、お藻代の時とちがった、他ほかのを選んだ。

生命いのちに仔細しさいはない。

男だ。容色なんぞは何でもあるまい。

ただお町の繰り言に聞いても、お藻代の遺書かきおきにさえ、黒髪のおくれ毛うらみばかりも、怨恨うらみは水茎のあとに留めなかつたというのに。

現代——ある意味において——めぐる因果の小車おぐるまなどという

事は、天井裏くるまぶの車麩くるまぶを鼠ねずみが伝つたうぐらいなものであろう。

待て、それとても不気味でない事はない。

魔は——鬼神は——あると見える。

附言。

今年、四月八日、灌かん仏ぶつ会えに、お向むかうの遠藤さんと、家内と一

所に、麴こうじ町まち六丁目、擬ぎ宝ほう珠しゆ屋根いしに桃ももの影かげさす、真宝寺まなほんじの花はな

御堂ごどうに詣もうでた。寺内てらうちに閻魔堂えんまどうがある。遠藤さんが扉かどを覗のぞいて、

袖そでで拝をがんで、

「お釈迦様と、お閻魔さんとは、どういふ関係があるんでしよ

う。

唯今、七彩五色の花御堂に香水を奉仕した、この三十歳の、竜女の、深甚微妙なる聴聞には弱つた。要品ようほんを讀誦どくじゆする程度の智識では、説教も濟度も覺おぼつか束ない。

「いずれ、それは……その、如是によぜがもん我聞という処ですがね。と時に、見附を出て、美佐古みさご（鮎屋）はいかがです。」

「いや。」

「これは御挨拶。」

いきな坊主の還俗したのもないものが、こはだの鮎を売るんだから、ツンとして、愛想のないのに無理はない。

「朝飯あさを済ましたばかりなのよ。」

午後三時半である。ききたまえ。

「そこを見込んで誘いましたよ。」

「私もそうだろうと思つてさ。」

大通りを少しあるくと、向うから、羽織の袖で風呂敷づつみを抱いた、脊のすらりとした櫛くしまき巻の女が、もの静しずかに來かかつて、うつむいて、通過つうがした。

「いい女ね。見ましたか。」

「まったく。」

「しつとりとした、いい容ようす子ね、目許めもとに恐ろしく情のある、口許の優しい、少し寂しい。」

三人とも振返ると、町並樹の影に、その頸許えりもとが白く、肩やつが窠くされていた。

かねて、外套氏から聞いた、お藻代の倂おもかげに直面した気がしたのである。

路地うちに、子供たちの太鼓の音が賑にぎわしい。入って見ると、裏道の角に、稲荷神いなりがみの祠ほこらがあつて、幟のぼりが立っている。あたかも旧の初午はつうまの前日で、まだ人出がない。地口行燈じぐちあんどんがあちこちに昼の影を浮かせて、飴屋あめや、おでん屋の出たのが、再び、気のせい
か、談話中の市場を髣髴ほうふつした。

縦通りを真直まつすぐに、中六なかくを突切つつきつて、左へ——女子学院の塀ひっかに添えつて、あれから、帰宅みちの途を、再び中六へ向つて、順ひっかに引返すと、また向うから、容子よこといい、顔立もおなじような——
これは島田しまだ鬻だの娘さんであつた——十八九のが行違つた。

「そっくりね。」

「気味が悪いようですね。」

と家内も云った。少し遠慮して、間をおいて、三人で齊しく振返ると、一脈の紅塵こうじん、軽く花片はなびらを乗せながら、うしろ姿を送つて行く。……その娘も、町の三辻の処で見返つた。春闌たけなわに、番町の桜は、静しずかである。

家へ帰つて、摩耶夫人まやぶにんの影像——これだと速すみやかに説教が出来る、先刻さつきの、花御堂の、あかちゃんの御母ぎみ——頂餅いただきと華をささげたのに、香をたいて、それから記しはじめた。

昭和六（一九三一）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2001年9月17日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古狝

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>